



忘れえぬ想い(忘不了／Lost in Time)

2006(平成18)年3月13日鑑賞<東映試写室>

監督=イー・トンシン/出演=セシリア・チャン/ルイス・クー/ラウ・チンワン/原島大地(ユナイテッド・エンタテインメント配給/2003年香港映画/108分)

……『PROMISE』(05年)では浮き世離れした(?)王妃役を演じたセシリア・チャンが香港アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞した名作を、涙をタツプリ流しながら鑑賞。明日は韓流「涙の女王」チェ・ジウ主演の『連理の枝』(06年)の鑑賞だが、さてその涙比べは……? 死んだ恋人の子供を引き取り、ミニバスの運転手としてしっかりと生きていく……。こんな意地っ張りで頑固な女はかなわんと思いつつ、絶対に見放すことができないのがこういうタイプ。切なく、危なっかしい人生だが、それでもそんな健気な生き方の最後は何とかなるもの……。だからこそ、人間っていいもの、そして映画っていいものなのだ……。

『SPL (殺破狼)／狼よ静かに死ね』 vs. 『忘れえぬ想い』

昨日3月12日(日)に観た『SPL (殺破狼)／狼よ静かに死ね』に続いて、今日3月13日(月)は香港映画を連チャン。しかし昨日は2005年の香港アクション映画の代表作だったが、今日は2003年の香港発感動的ラブストーリーの代表作。もっともラブストーリーといっても、ヒロインであるシウワイ(セシリア・チャン)の個性は一風変わったもの。

映画の冒頭は、ミニバスの運転手マン(ルイス・クー)が交通事故によって死亡するという衝撃的なシーンから。ロロ(原島大地)という男の子を連れだしたマンとの結婚を控えていたシウワイはマンの死亡によって絶望の縁に立たされたが、意地っ張りのシウワイは涙を見せず、ロロを育てていく決心をし、ミニバスの運転手に……。こん

なシウワイの健気な姿に同情し、応援したのがファイ（ラウ・チンワン）。ファイも今でこそ真面目に運転手をしているが、離婚経験のあるワケあり男……。こんなワケあり同士の男女が、ロロを媒介として（？）次第に接近……？

男の私は、ファイと同じように「意地を張るのもいい加減にしろ！」とシウワイに言いたくなるが、それでもシウワイは頑固で、なかなかその生き方を変えようとしな。さて、そんな2人が、それぞれの持つ縛られた過去と決別し、新たな人生に向かって歩み始めるのは一体いつ……？

セシリア・チャンという女優は……？

セシリア・チャンの最新作は、^{チェン・カイコー}陳凱歌監督の『PROMISE』（05年）。そこで彼女は、日本人俳優の真田広之扮する光明と韓国人俳優のチャン・ドンゴン扮する昆崙という2人の男性から愛される王妃役を演じたが、この作品そのものがファンタジーというかマンガ的であったため、セシリア・チャンの演技力や個性はあまり発揮できていないもの……？

しかしこの『忘れえぬ想い』のシウワイ役は、1980年生まれのセシリア・チャンに実にピッタリのはまり役。

セシリア・チャン自身がシウワイのように頑固で意地っ張りなのかどうかは知らないが、本当にシウワイ役になりきっていることがひしひしと伝わってくる。そもそも子連れ男との結婚を、どちらかというとならシウワイ主導で決意するだけでも、かなり変わった女だと思われるが、マンが交通事故で死亡した後、ロロの手を引きながら「涙も出てこない」と母親に訴えるシウワイの姿は健気そのもの。

20歳そこそこの女だからミニバスの運転はヘタクソだが、ロロに対して示す母性や、生きていくたくましさにおいては決して男に負けない強さもひしひしと伝わってくる。しかし同時に、それがかなり無理をした生き方であることもありありと……。

香港アカデミー賞最優秀主演女優賞は当然

こんなシウワイというキャラをうまく描いた脚本も見事だが、それを完璧に演じきったセシリア・チャンの女優としての能力に感服。パンフレットには、「マギー・チャンの再来といわれる演技力、美貌を兼ね備えた本格派の人気女優」と書かれている。しかし私は、演技力の点では同感だが、美貌面ではマギー・チャンとは全く異質の顔

立ちだと思っている。つまり、マギー・チャンは誰がどう見ても、またいつどんなシーンでもかわいい系の美人だが、この映画ではセシリア・チャンが美しいと思わせるシーンはそれほど多くない……？ しかしそれがかえって、この映画では現実味があって彼女の魅力を高めることに……。

慣れないバスの運転から子育てまで、髪を振り乱しながらなりふりかまわず働いているため疲労感たっぷり。したがって、お姉さんからは「ひどいやつれよう」と言われるような役を演じているのだから、キレイに化粧し、着飾る余裕など全くないのは当然のこと……？

しかし時折見える彼女のキラリとした美しさは、『PROMISE』でも全然見えなかったもの。彼女がこの作品で香港アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞したのは当然だろう。

香港のまちとミニバス事情

この映画を本当に理解するためには、香港のまちとミニバス事情を勉強することが必要。偉そうに言うようだが、私は1997年の香港返還直前に香港旅行をしたから、それをよく知っている……？ といってもミニバスには乗ったことはないが……。

広大なアメリカ大陸や中国大陸の地方都市ならいざ知らず、ニューヨークでも北京でもそして日本の東京・大阪でも、市内中心部での車の運転は結構大変な作業。しかし、その数倍も大変なのが国の面積が極端に狭い香港の中心部での運転。

もともとミニバスは公共交通機関ではなく、いわば日本の「白タク」と似たようなかなりヤバイ存在だから、その運転手として食っていくのは男でも大変。したがって、死んだ恋人マンの後を継いで（？）、女だてらに（？）ミニバスの運転手をするというのは無謀きわまりない話。ヤクザへのシマ代の支払いから、乗客の乗せ方・降ろし方、果ては違法スレスレの交通法規への対応など、ベテラン男性運転手でもその競争は大変。

そんな大変な仕事に身体を張って挑むシウワイのチャレンジ精神には感服するものの、どう見てもそこにはかなりの無理が……。第1、いっぱい立っている交通標識や二重の黄色い線の意味すらわかっていないのだから、運転はホントに大丈夫……？

ファイは実に「いい人」だが……？

本作『忘れえぬ想い』の前作ともいえる作品で、イー・トンシン監督が1993年につくった『つきせぬ想い』に主演し、大ブレイクしたのが、本作でファイを演じたラウ・チンワンとのことだが、残念ながら私はそれを観ていない。

10年も経てば同じ感動モノ、恋愛モノでもその役柄が大きく変わるの当然で、本作ではファイは妻からダメ亭主と宣告されて逃げられてしまった中年男という設定。もっともそれが明らかになるのは映画中盤からで、それまではミニバスの運転手として真面目に働き、シウワイの応援をしてやっている実にいい人……。

運転手仲間の目には、ファイが下心を持ってシウワイに接しているように見えるかもしれないが、ファイは決してそうではなかったはず。

交通事故の現場を最初に発見し、虫の息状態となっていたマンの状態を知る人間として、シウワイに対して当然のことをしているだけという気持だったはず。しかしそれがいつしか……？

それでも妻との離婚を経験しているファイは、自分の気持を積極的に打ち明けることはなかなかできなかった。そして遂に、という状況下でもそれは同じ……。そんなファイに対してシウワイはファイの部屋の中で、「あなたはホントにいい人ネ」と言い残して部屋を出て行ったが……。

「いい人」止まりのままでは、本当の感動は生まれないことは明らか。さてその後の展開は……？

ケータイの他、「ルス録」が重要な小道具に

最近の映画はケータイを小道具として使うことが多いことは昨日観た『SPL（殺破狼）／狼よ静かに死ね』の評論にも書いたとおり。この映画でも、冒頭にマンの持っていたケータイをめぐるファイとシウワイとの間に面白い（？）シーンが登場するから、まずはそれをじっくりと……。

しかし本作ではケータイの他に、自宅に設置してある電話のルス録機能が大きな役割を。その第1は、死んだマンのルス録メッセージ。孤独に打ちひしがれ、絶望的な気持になった時、シウワイはここに電話すれば、死んでしまったマンのナマの声をいつでも聞くことができるわけだ。

他方、ファイのルス録には、離婚して出て行ってしまった妻からのきつーいひと言メッセージが録音されたまま。ファイは時々このボタンを押すことによって、この妻の声を聞きつつ、それでもいつか妻が子供を連れて戻ってくるのではないかと期待をかけていたわけだ。

去って行った人の思い出の品物もいいものだが、それよりもナマの声を聞く方がインパクトが強いのは当然。しかし、いつまでも過去の思い出や感傷に浸り、そこに逃げ場所を求めているのでは、新しい世界に踏み出せないのも当然。シウワイもファイも自分たちを取り巻く状況が大きく変わっていることはわかっているはず。そして、2人が今後進むべき方向は観客の目には明らかなのだが、さて2人は……？

大地クン、残念！

シウワイが面倒をみているロロは、死んでしまったマンと離婚した妻との間に生まれた子供。そんなロロをかわいがり、シウワイを応援していたファイの気持にいつしか大きな変化が現れてきた。

こんな気持は、シウワイも同じ。しかし、ファイも離婚した妻との間に子供がいる立場。シウワイもファイもお互いの気持を率直に打ち明けることは簡単にできることではなかった。

そこで有効な外交カード(?)になったのが、間に立つ(?)ロロ。お互い直接面と向かって相手に言えないことでも、ロロを介してワンクッション置けば、スムーズに言えることが多いもの。

現実問題としては、死んだ彼氏が残した息子を介して、赤の他人の男と女が恋に落ちるという確率はかなり低いと思われるが、この映画ではロロの存在が大きなポイント。

シウワイがファイに電話するについて、「ロロが声を聞きたいと言ったから……」などというのは真っ赤なウソだが、その方が電話しやすいことはよくわかる。

そんな重要なロロの役を演ずる原島大地クンは北京語・広東語・日本語を話す、香港で人気の日本人子役とのこと。そして、「本作で、香港アカデミー賞新人賞にノミネートされたが、これ以前に他の作品に出演していたことが判明しノミネートを取り消されてしまった」とのこと。原島大地クン、残念！

セシリア・チャンの熱演に涙、涙また涙

私は基本的にホラーものやSFものは嫌いで、ラブストーリーや歴史ものが好き。そして何よりも感動モノ映画が大好き！ したがってこの映画は最初からある種の期待をしていたのだが、その予想どおり、最初からセシリア・チャンの熱演に圧倒され、つい涙が……。恋人の死亡を聞いても、「今電話をもらったところだ。そんなはずがない」と叫びながら後ずさりしていく彼女の演技を観ただけで、もう涙……。

最近、年とともに涙腺が緩んでいるのかもしれないが、この映画では、とにかく意地っ張りなシウワイの生き方が全編に登場してくる。したがって、それを「おいおい、もういい加減に……」と思いつつ、その健気さについ涙。

そして後半のファイとの恋の成就(?)やマンとの決別に至るプロセスについても、内心必死になって応援……。それもこれもすべてセシリア・チャンの表現力と演技力がなせるワザだろう。

『PROMISE』のつまらなさを感じていただけに、この映画でのセシリア・チャンの体当たり演技のすばらしさに酔いしれ、涙、涙また涙という状態になってしまった。試写室から出る時はちょっとカッコ悪くて、主催者にきちんとあいさつできなかったため、そのお礼も兼ねてこの評論としよう。

2006(平成18)年3月14日記